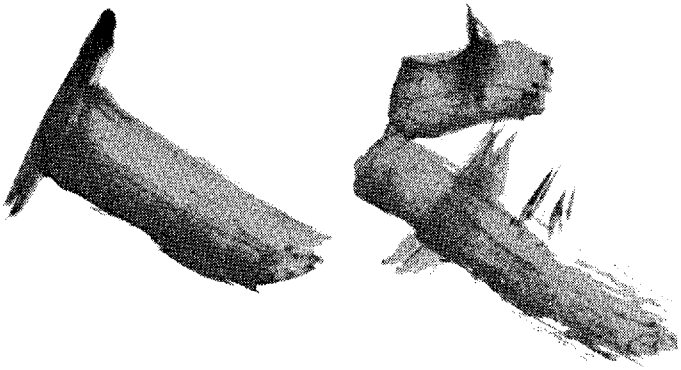
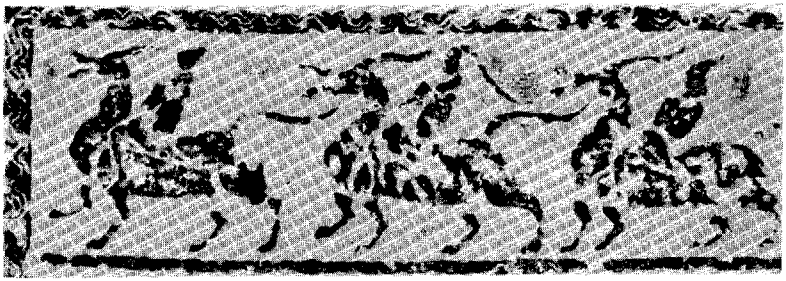
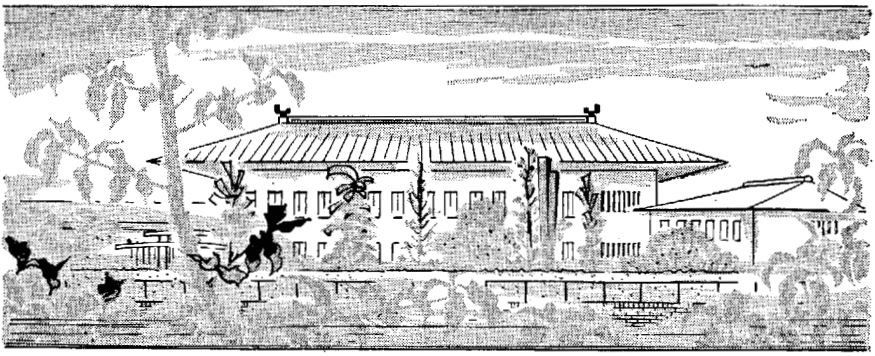


第 九 号



1 9 7 3

京都大学人文科学研究所



人　文　第九号　1973年3月—8月

もくじ

わたしの考え
青竜寺の煙瓦……日比野　丈夫……2

講　演
退官記念講演会……平岡　武夫……4
シナ学四十年
袁世凱と帝政問題……小野川秀美
夏期公開講演会……横山　俊夫……6
ベンガルの熱い冬
ガンダーラとバクトリア……桑山　正進
トルコの村から……松原　正毅
イタリアを歩いて思ったこと……会田　雄次

書評……13
井上清・渡部徹『大正期の急進的自由主義』（樺山）／上山春平『歴史と価値』（愛宕）／吉田光邦『中国科学技術史論集』（橋本）／会田雄次『極限状況の日本人』（熊倉）／福永光司訳『列子』（山下）／島田虔次『荻生徂徠全集』（飛鳥井）／渡部徹他『堺市史』続篇第二・三巻（藤枝）

共同研究のうごき……22
この二年間—日本における市民文化の形成—（熊倉）／語類の会読（三浦）／フランス第二帝政期の研究（樋口）

研究ノート……26
「改造」思潮と右翼（古屋哲夫）／深層論理と表層論理（内井惣七）／「文件」の生態（竹内実）

旅……29
ヴェルサイユ批判（多田道太郎）／オリエンタリストの会議（川勝義雄）／提謂経あれこれ（牧田諦亮）

書いたもの一覧（四八年三月—八月）……32

お客さま（中日友協訪日代表団・中華人民共和国出土文物展代表団・ソルンツェフ氏）（20）

人のうごき（12）・附属東洋学文献センター（25）

わたしの考え

青竜寺の煉瓦

日比野丈夫

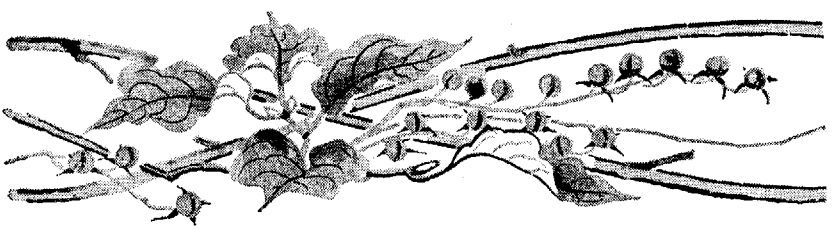
唐の長安の新昌坊にあった青竜寺は、日本の仏教界とはとくに因縁の深いところである。その遺址については古くからいろいろの説があるが、日本の学界では今の西安の町から東南三キロ半ぐらいにある祭台村の石仏寺がそれだと信ぜられていた。ところが最近の中国の学者の研究によると、それは誤りで、祭台村からさらに二キロばかり東南にあたる炉廟村の東南角辺であるとされている。そこには新しく青竜寺址という石碑が立てられ、日本からの訪問者は必ずここをたずねて懐古にふけるのが、しきたりのようである。

古い歴史に結ばれた西安と京都とは本年から姉妹都市となり、西安をおとずれた京都市長は大変な歓迎を受けたという。そのとき青竜寺址から発掘された、古い煉瓦の破片を記念品としてもらってきたと聞いて、

いよいよこれを機会に多年の念願が実現するのかと思った。それはほかでもない、京都ほどの町でありながら、まだなかった郷土歴史博物館が立ち、そこに日中文化交流の歴史を実物をもって示す学習の場がほしい、という念願がかなえられるかと思ったのである。しかし市長はそんなことにはおかまいなく、煉瓦をさっさと東寺に寄贈してしまった。

もちろん、それが悪いというわけではない。青竜寺は、東寺としては開山弘法大師が恵果阿闍梨から真言の秘法を受けた、とくに由緒の深い寺だからである。しかし、弘法ののちには、円行、円仁（慈覚大師）、円珍（智證大師）、宗睿らもみなこの寺の世話になったのであって、円珍のごときはここで法全から親しく瑜伽の法旨を受けた。このように青竜寺と日本仏教界との関係は、ただ東寺だけでもなく、真言一宗だけでもないのである。

ところで、東寺からお招きを受けて拝見した青竜寺の煉瓦片は、一握りの大きさもない、いわば貧相な土のかたまりであった。しかし、これをじっと見ているうちに、いろいろなことが思い浮かんできたのである。ただの一片の土のかたまりであっても、市長は市長としてこれをもらったという意味をなぜ考えなかったのか。姉妹都市の土をもらったのだから、たとえ東寺へプレゼントしたところで、これを基礎としてその上に永遠の友好を築くプランを考えつかなかったとしたら、西安の厚意を無にすることになりはしないか。……これを機会に、京都の遺跡、貴重な平安京の遺跡保存をまじめに考えるとともに、郷土の歴史博物館の実現を計ることを強く訴えたい。



講演

退官記念講演会

一九七三年三月一七日
於 分館ホール

シナ学四十年

平岡武夫

社会学・倫理学・美学そしてシナ哲学のいずれを専攻するか、なお決めかねつつ京大文学部哲学科に籍をおいたのが一九三〇年。フランス留学から帰られたばかりの小島先生が、この年、学位を得て中哲の新主任教授、吉川先生が始めて講師に就任、中文の倉石助教授が二年半の中国留学から新帰朝。どの先生も張り切っておられた。その御講義についてゆくのは張り合いのあることであった。私の道はそうしてきまった。

この年はまた東方文化研究所のあの白亜の殿堂ができ上った年でもある。それは東方学者の夢をふくらませた。卒業の後、副手生活を終えるころ、この研究所が共同研究の体制をとるようになり、一九三五年、尚書正義の校定を開始した。幸に私はその末席に加えられて、文字の異同の比校に従う。それから十年、がっちりと尚書を読んだことが、私の経学の根底をつちかう。やがてそれは『経書の成立』(1946)『経書の傳統』(1951)となり、「天下的世界観」の概念を確立し、私の学問体系の基調をなす。

それよりさき、一九三六年春、北京留学の機会を与えられる。上野財団の恩恵である。この時、中国では抗日運動が激烈。しかし学問の交りは民族と政局とを越えて結ばれることを随処に体験。殊に一九三七年七月五日より易県に旅行、はからずも蘆溝橋事件の勃発によって彼の戦線の後方にいることになった私に、農民、巡官、そしてこれから前線に出征するという軍人たちが示した言動は、彼らのいう「文」といい「和」というものが何であるかを切実に知らしめ、私の中国文化観を確固たるものにした。

留学後半の一年は銭稲孫教授宅に寄寓。中国知識人の日常生活を体験したことも大きな幸せであった。

一九三八年秋、帰国、東方文化研究所に研究員として迎えられる。尚書正義の共同研究は依然として続き、もっぱらそれに従事する。しかし一九四三年、『尚書正義校定本』を刊刻し終えた後、私の関心は漢字の文化にひろがる。すでに私の研究は天下的世界観と「文」「和」の理念を基調にして進んでいた。そしてこれらのものの実践と表現の場を、漢字の文化に見つけていたのである。中国文化の特質は漢字文化にあると考えた。『漢字の形と文化』(1959) の類はその一つの試みである。しかし主要対象を唐代の文化においたことから、唐代の暦・行政地理・詩と散文の作家と作品など、基礎工作をすすめて、一九五九年より六五年にいたる間に『唐代研究のしおり』十六冊を編集刊行した。同時に、一九五二年に「機関研究」の制度がはじまり、人文科学研究所は「唐代史料」の編集をもってそれに応じ、私にその衝に当ることを命じた。鋭意、基礎資料の整備に努力してそれを完了し、逐次「唐代史料稿」を世に贈りつつある。これらの準備の上に、さらに研究の焦点を『白氏文集』にしぼったことから、その校定本三冊を印刷し終えた。それは大学卒業の後、満四十年の一九七三年三月のことである。

袁世凱と帝制問題

小野川秀美

袁世凱の帝制への野望は、第二革命の鎮圧に成功した時に胚胎したと考えられる。議会を廃止して諮問機関にすぎない参政院を設け、約法を改訂して権力を大総統個人に集中したことなどは、そのあらわれである。共和制を否定して帝制を、という動きには、もう一つ清朝の復辟をはかる一派があるのだが、その派の労乃宣の劃策などにたいしては、袁はこれをひとまず抑えるのである。

袁の帝制への第一歩は、米人顧問グッドナウの「共和与君主」論の発表によりふみだされ、一九一五年八月の籌安会の発足により具体的に開始される。籌安会の黒幕は袁の長子克定であり、その活動資金は梁士詒から出ていた——黒幕は梁啓超との説（水野梅暁）もあるが、いまは判断を保留する——。その後、事態は急速に進み、十一月には選挙で一九九三票満票を得て袁が推戴される。

しかし、列強は日本をはじめ帝制延期の勧告を行うし、北方諸将も消極的な態度しかとらず、やがて蔡鍔の討袁軍が起り、袁は孤立無援のうちに翌年六月病没した。袁死後の政局は、まったくの軍閥割拠の局面を迎え、以後、満州国の傀儡皇帝の問題を除き、中国において帝制問題が現実の政治的課題となることはなかったのである。

（文責編集委員）

夏期公開講演会

昭和四八年八月一日―三日
於　イタリア会館

ベンガルの熱い冬

横山俊夫

ベンガルの冬は、日本の冬にくらべて、ずい分異質である。ひる間は三〇度を越すかと思うと、朝夕は厚手のセーターがほしい。カルカッタだけ、さほど冷えこまないのは、人ごみと煤煙のせいだろう。

昨年の冬、建国一周年をむかえたバングラデシュの人々は、熱狂と絶望の、およそ相容れぬ両極端の感情を味わっていたように思われる。

この国の独立は、今世紀なかばに昂揚した植民地独立運動、「第三世界」の民族主義に対する、〈皮肉〉として始まった。第一に、それは旧植民地国内の「少数民族」の独立であったこと。さらに、東パキスタンの自治運動が独立を要求するまでに至ったのは、「西」による大量殺戮に余儀なくされてであったこと。

そして、バングラデシュを「独立」に至らしめた直接の契機である、インド軍の介入という事態は、インド内に流入した二千万に及ぶ「難民」がもたらしたものであったという逆説。これが第三の、かなしい皮肉である。

この、いわば「白紙の独立」を、いかに克服するか。採りうる、もっとも安易な道は、できるだけ「自治」のレベルにもどすことであろう。しかし、この亡命帰りの官僚たちの考えだけは認めがたい人々が、すでにいる。

かつてこの土地を死守した、青年義勇軍、ムクチバヒニのメンバーである。講演では、既成のイデオロギーでなく、みずから、独立の〈意味〉の体系を、政府批判を通じて創ってゆくほかない、彼らの気概と苦悩を語った。彼らの体現しつつある〈政治文化〉が、さらに、コミュナリズムを越えうる可能性をもつかどう

かについては、いくつかの事実を提示するにとどめた。

私が伝えたのは、彼らの、濃い疲労の色であったかもしれない。「少数民族」が、みずからの歴史を創る道は、険しい。彼らが、「オキナワ」に強い関心を示したことは、私には新鮮な驚きであった。

一方、西ベンガルの人々は、この独立を「解放」と呼んで歓迎している。カルカッタを中心に、ベンガル文化を称揚するさまざまな動きが出ていることは否めない。知識人の間では、分離独立以来の、インド・パキスタン史への反省が強まっている。

一例として、偶然参加することになった、スバス・チャンドラ・ボースの国際セミナーの模様を伝えた。とくに、彼の思想の問題については、ナチス及びインド共産党との関係を明らかにすること、その強固なコミュナリズム批判に、一九世紀末のベンガル・ルネサンスの旗手たちの影響をよむこと、などに討論が集中した。

各国から寄せられた四〇篇あまりの論文は、近く、カルカッタのネタジ・バワンから二冊本で刊行される予定である。

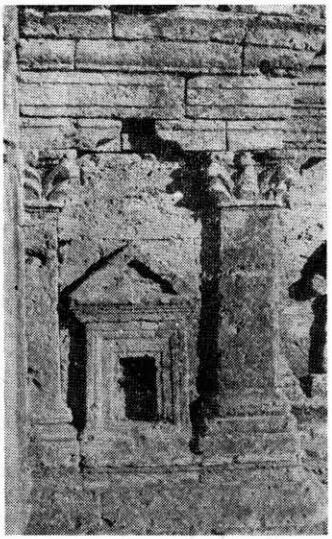
東西ベンガルには、いま、或る〈熱気〉がただよっている。この諸々のエネルギーを殺すことのない、新たな〈意味〉が創造されるかどうか、私には興味のつきない問題である。

ガンダーラとバクトリア

桑山正進

ガンダーラ仏教彫刻類は大量に遺存するけれども、彫刻類だけ抽出した編年方法が空転することは、この一世紀にわたる甲論乙駁の多様な論説がそのまま証明している。当美術に関する限り美術様式論は曖昧な方法論であり、ガンダーラ美術の編年基準に彫刻類自身を使うことは当面避けるべきである。

およそ文化たるものがひとり立ちして孤立して存在することはなく、当美術もまたその例外ではない。ガンダーラという風土の中で展開した仏教の造像活動をその風土がもつ特性と切断して検討するわけにはゆかないということである。そこで、とくに最近再燃したバクトリア美術とガンダーラ美術との関連からも、アム＝ダリヤ中流域（バクトリア地方）との対比が、この特性を明確に浮彫りにするひとつの手だてであるはずで、それはガンダーラ美術の始源や系統の問題をそこから遠まきに把握することに他ならない。



ストゥーパの柱形装飾

アム＝ダリヤ中流域ではグレコ＝バクトリア時代において、コリントス系柱頭と柱礎やペルセポリス系柱礎（柱頭の遺例は知られない）を使った壮大な円柱が列柱廊を形成する建築があった。この建築技術は、クシャーン時代までには、既に柱頭と石柱とを使わず、柱礎のみに遺存するようになった。しかしペルセポリス系柱礎とコリントス系（正確にはアッティカ風）柱礎とは、次のポスト＝クシャーン時代イスラム時代以前まで規模のいかんにかかわらず執拗に存続使用されたのである。バクトリア地方がこのような柱礎を石造の円柱以上の部分が廃絶したのちまでもなお放棄することなく使用したという事実は、一旦根ざしたいわば西方系の文化を伝統的に保持する風土であったことを示すものである。

これに対して、タキシラを含めたガンダーラにおいては、バクトリア地方のような柱礎のみ存続したという証拠もほとんどなく、柱は板石によって支えられる場合が通例であり、ましてや柱頭から柱礎まで一貫して石造の例は時期も例数も建築物の性格もきわめて限定されるのである。したがって、ガンダーラでは、バクトリア地方とまったく対蹠的で、建築に関する限りバクトリア地方のような伝統はたえてなかったと判定される。

ところがガンダーラでは、建築構造上不可欠な要素として役割をになったペルセポリス系あるいはコリントス系の石柱が絶無に等しいのに反比例して、構造上無価値のコリントス系の柱すなわち建築装飾としての柱形 Pilaster が遺存する例は実に多量である。しかも柱形は、実用の建造物の壁面を飾るのではなく、ストゥーパという特別な建造物―宗教建造物の装飾として存在したことに最大級の注意を促したい。ガンダーラで出現したストゥーパがその最初期から正方形平面の基台をもち、基台側面にこの種の柱形を表わしているのである。

何故ガンダーラで方形基台が採用され、しかもその側面を飾るのに、実用建築では利用のなかった柱形を用いたのか。その解答には上述の両地方の伝統のちが

いが重要なポイントを与える。すなわち柱形装飾の方形基台は、ガンダーラ自生でもバクトリア影響でもなく、柱形をつけた方形平面の或る原型、それは型式的にも宗教的にも等価値と当時判断されたもの、そういうものから移しかえられたものと考える。のちにあらためて詳述したい。

トルコの村から

――犠牲祭の日――

松原正毅

I

今年の犠牲祭（クルバン・バイラム）は、一九七三年一月十五日からの四日間であった。回教暦の新年はこの日からはじまる。

わたしたちが滞在していた村は、人口約二千人、戸数約四百戸くらいの、比較的大きな村である。村は、セミ・アリッド・ゾーンにあたるアナトリア高原の西南端に、位置している。村の東から南の方角には、地中海沿岸ぞいにはしるタウロス山脈の一端がせまっている。このタウロス山脈が、アナトリア高原を、地中海性の温暖な気候から切断している。そのため、村でも、厳冬期にあたる一月には、気温が摂氏零下二十度前後までさがるのは、めずらしいことではなかった。

村の犠牲祭は、このような厳寒のなかでとりおこなわれた。犠牲祭の前日には、みんな、風呂をつかって身をきよめる。風呂場は、各家の押入れの一角にもうけられている。ここに湯気をたてこめ、汗をながし、行水式に風呂をつかうわけである。家々の内部の大掃除もおこなわれた。

犠牲祭の第一日目、朝八時ころから、村の男は、全員ジャーミー（回教寺院）にあつまる。子供から老人まで、また、村外ではたらいている里がえり組も、みんな顔をそろえていた。各人とも、一帳羅の服をきこんでいる。火の気のないジャーミーの内部が、人いきれで、徐々にあたたまってくる。ここで、二時間あまり、イマム（導師）の説教をきく。犠牲のほふりかたについてのこまかい注意があったあと、全員でアッラーへのいのりをささげた。

ジャーミーの敷地内から道路にでると、だれかれとなく握手し、「バイラムヌズ・クットゥル・オルスン（おめでとうございます）」とあいさつをかわしあう。いつもは閑散とした村の道路に、人波があふれ、そこここに、ひとのかたまりができる。しばらく、にぎや

かなおしゃべりがかわされたあと、波がひくように人影がきえていった。

それにかわって、各家の客間や、客室（ムサフィル・ハネ）から、談笑のにぎわいがながれてくる。父系の親族を中心とした宴会が、各所でおこなわれているのである。しかし、現在では、この父系の親族集団の紐帯は、ゆるみつつある。宴会の席の顔ぶれにも、父系の親族以外の出席者が、おおくみられた。

宴会がおひらきになると、犠牲をほふる作業がはじまる。もっとも、犠牲は、犠牲祭のつづく四日間のうちにささげればよい。しかし、村では、第一日目の昼におこなう家がおおかった。以前は、犠牲獣を、父系の親族単位で解体していたそうである。現在では、妻方の姻戚関係を基盤に四・五人でウシを一頭、犠牲につかうことがおおい。また、ヤギを犠牲としてほふる家は、むかしよりすくなくなった、という。

犠牲獣の解体は、イマムのおいのりからはじまる。そのあと、四肢をしばられ、地面に横だおしになった犠牲獣の喉首を、イマムのもつナイフが、一気にかききる。首をおとしたあと、肛門から腹部へ切れ目をいれ、皮をはいでしまう。そして、それを家の軒先につりあげ、解体する。解体された肉塊は、共有者のあいだで厳密に均分された。この肉の一部は、犠牲祭のあいだのごちそうに供されるわけである。この日、首都アンカラでも、街の道路の雪は、犠牲の鮮血でそまった、とのことである。

II

さて、犠牲祭ではがされた皮は、どうなるのか。

この皮は、飛行機になる。トルコ共和国全土でおこなわれた犠牲祭にともなう皮は、すべて国へ寄付される。国は、この皮を売り、その収益を、国産機製造のための費用にあてるのである。ここには、イスラム教をてこにした、ナショナリズムの昂揚への意図が、あきらかにうかがわれるであろう。

現在、トルコでは、国産機製造のキャンペーンが、ひろくおこなわれている。そのプロパガンダの文句は、切手にさえ印刷されていた。そこには、工業の自立をめざす、トルコのせつないほどのねがいが、にじみでている。最近、トルコ国内では、トラクターなどの大型農業機械や電気製品などの、くみたて工場が、急増している。日本の自動車工業の進出も、そのうちおこなわれるそうだ。ノック・ダウン方式により技術を導入し、製品を近隣の中近東諸国へ輸出する政策も、かんがえられているようである。いわば、まず、中継工業立国をめぞそうとしている、とでもいえようか。

ところで、トルコの近代化へのあゆみを、日本の近

代化とパラレルにあつかおうとする議論が、いくつかある。両者とも、急速な近代化に成功した、という点を、とくに重視するためである。

しかし、この両者の近代化への過程を、おなじカテゴリーのなかでかんがえるのは、すこし無理があるだろう。比較文明論的にみれば、オスマン・トルコ帝国は、東の清朝と対比すべきであろう。帝国形成初期において、遊牧民族が、支配層として、既存の巨大文明のうえにのしかかってゆく過程。東では、満州族が漢文明のうえに、西では、チュルク族が、ギリシャ・ローマ文明、アラブ・ペルシャ文明のうえにかさなる。また、帝国解体期における、ヨーロッパ諸国による領土侵略と分割。そして、二十世紀にはいってからの激烈な革命など、……。

アタチュルクによる新生トルコ革命は、かなりはげしい文化大革命でもあった。いくつかの革命の事績のなかでも、イスラム教の世俗化は、トルコの近代化にとって、重要な意味をもつもののひとつであろう。もっとも、アタチュルク在世時においても、また、その死後においても、イスラム教の徹底的な世俗化には、かならずしも成功しているとはいえない面もいくつかある。現在、村々のジャーミーのイマムたちには、公費から給料が支給されている。イマムは、公務員となったわけである。

世俗化の対象となったイスラム教は、依然として、強い根を村々にはっている。それだからこそ、犠牲祭の日の獣皮が、トルコの国防・工業政策と直結しうるわけでもあろう。また、そこに、イスラム教世俗化の延長線と、国教復帰をめざすイスラム教のまきかえしとの二重像を、みとることもできるかもしれない。

いずれにしても、つい最近まで、自足的、閉鎖的でありえたトルコの村々が、急速に、国家のあみの目のなかにふかくくりこまれてゆくことは、さけがたいことである。事実、現在すでにそうなっているのだが。犠牲祭の獣皮の、国家への供出は、そのひとつの象徴でもある。

トルコの国産機第一号がとぶとき、村の犠牲祭は、いままでとかわりなくつづけられているであろうか。

イタリアを歩いて思ったこと

会田雄次

イタリアは住民気質も社会もはっきり南北に分れていて、近代は北部の背負うところとされている。ナポ

リのイタリア人はこの北部を代表するミラノ人を、ぐず、のろまと蔑視するが、敏捷でずるいだけの南イタリア人だけでは今日のイタリアは保たない。

そういうミラノ人もふくめて、イタリア人は嘘つきで、すばしこく、人の裏を欠いてばかりいる信頼できぬ民族だという評判も高い。事実、観光地や大都市では、旅人はいやというほどそのことを思い知らされる目に会う。

しかし、一歩立入って考えて見るとイタリアは良くも悪しくも大人の智慧の国、批判する方は青年の観念の国だということになる。青年というと立派だが要するにカッペということだ。歴史的経験の重さということが全然比較にならないわけである。だまし方のうまさというのは大人の智慧の、悪しき、微細な一面にすぎない。イタリア人の精神生活のひだはアルプス以北の国の人々より、はるかに繊細で複雑なのである。

中国のプロ文革前後　井上　清

中国各地の文物　林巳奈夫

この二つの講演は、本誌第八号所載の「訪中報告」と重複する所があるので、ここには概要をのせない。

人のうごき

三月一日～八月末日

衣川　強助手（東方部）は神戸商科大学助教授に。
阪上　孝助手（西洋部）は大阪市立大学講師に。
山本有造助手（日本部）は神戸商科大学講師に。
竹内成明助手（西洋部）は同志社大学助教授に。
望月節子助手（東方部）は辞職（以上、三月三一日）。
平岡武夫・小野川秀美両教授（東方部）は停年退官。
川勝義雄助教授・市原亨吉助教授（東方部）は教授に（以上四月一日）。
梅棹忠夫教授（西洋部）は国文学研究資料館長に配置換、併任教授（四月一二日）。
竹内　実氏を助教授（東方部）に採用（五月一日）。
曽布川寛氏を助手（東方部）に採用（七月一日）。
太田武夫助教授（日本部）は教授に（七月一六日）。
井上忠司助手（日本部）は甲南大学助教授に（九月三〇日）。

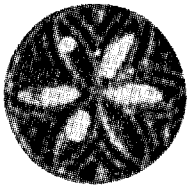
○河野健二所長を団長とする訪中学術友好代表団（副団長島田虔次、秘書長　井上清、団員　林屋辰三郎・福永光司・上山春平・林巳奈夫・小野和子）は北京大学の招請により三月二四日伊丹発、中国各地を訪れて四月二五日に帰国した。本誌は前号を「訪中特輯」号とした。

○牧田諦亮助教授は五月一〇日伊丹発、丹光大学・東国大学で、第一回日韓仏教学術会議に出席したあと、パリの第二七回国際東洋学者会議に出席して、七月二九日帰学。

○川勝義雄教授は七月一三日羽田発、パリの第二七回国際東洋学者会議に出席し、八月一四日帰学。

○多田道太郎助教授は八月一一日羽田発、ブルターニュ地方の遺跡を調査し、九月一六日帰学。

書評



井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義』

（B6判、五二六頁、東洋経済新報社）

めずらしく低くくもった秋の空のように、わたしは憂鬱だ。一キログラムをこえる（紙不足のおりから、目方でみれば）書物の評など、原稿料なしで、できようものか。

索引からキー・ワードだけをひいて、全文読んだような気になる、という奥の手もかんがえてみた。やんぬるかな、索引がついていない――たしかに、これは欠陥商品だ――。おまけに、愚かなことに、権威ある批評に、さきに目をとおしてしまった。いまさら、それを借用してもはじまらない。――この適切なレジメと批判は、参照にあたいする（『史学雑誌』八二―五、評者は有泉貞夫氏）。かくして、気が重いのである。

さのみならんや。「自由主義」であれ、なにであれ、主義についてのオポチュニストで、「急進的」ではない、ぐうたらの私は、日本近代史学がもつ、学問的立場の厳格さをまのあたりにして、わけもなく、たじろいでしまう。執筆者のイデオロギー色分け、など、下衆のかんぐりを繰返し、およそ、様にならないのだ。

まだまだ、気の重さは癒えない。たぶん、その世界では約束事なのだろうが、とうとつに、「経済的自由主義から政治的自由主義へ」とか「立憲帝国主義」「ブルジョワ民主主義的な発想」、そして「急進的自山主義」とやられると、ぼう然としてしまう。素人が読むには、これらの概念は、あまりに多々複雑で、とらえようがない。満州を「満州」とことごとく表記するほどのエネルギーを、この概念群の整理にまわしてくれたら、などとぼやいてもみる。

とはいえ、経済雑誌『東洋経済新報』が、大正期日本における、社会合理主義の伝統をきずいたという事実は、まちがいなく、安定した慰さめである。反貿易保護論、税制論、財政・平価論、また反植民地、反帝国主義や非戦論、普選論など。国富の増加と、自由な生産・流通の擁護、という「非特権資本家層ないし中小商工業者層」たる広汎な「実業人」（本書松尾論文）の、経済的自由主義を代表していよう。わたしは、これを、市民社会における実務家的自由主義と呼んではどうかとおもう。実務家層としての内務官僚にも、大正期普選推進派という自由主義者がいた（堀切善次郎ら）。大正八年以降の臨時法制審議会にもまた、民法の改竄に抵抗する学問的実務家の、法的自山主義者がいる（穂積重遠・美濃部達吉ら）。

市民社会とは本質的には、自山主義的である（自由であるとはかぎらないが）。日本

の実務家的自由主義の、市民社会の哲学は、たぶん、オックスフォード・スクールの経済的自由主義にも、フランス人バスティアやトックヴィルにも、ひけをとらない。

実務家的自由主義と市民社会の哲学。この座標軸にすえてみれば、『新報』は孤立してはいない。だんだんと、明るい期待の色がさしてくるのをおぼえる。

とはいえ、うまい話ばかりではない。『新報』もまた、「満州事変」いご、日本帝国主義の擁護にかたむくとなれば。そしてなお井上清総帥が「日本資本主義の利益という視野」を出られなかったブルジョワ民主主義と、居丈高に宣告するとなれば。希望の灯はやはり幻だったのだろうか。

秋の空は晴れのちくもり、とうとう霖雨がそぼ降りはじめた。

（樺山　紘一）

吉田光邦著『中国科学技術史論集』

（B5版、六二八＋二二頁、日本放送出版協会）

この書物には、昭和二六年から四五年までに発表された中国の殷周時代から明清時代までの科学技術の論文が二一篇収められており、章だてにして一八章からなる論集である。もしこの著者のように多くの論文、試論、評論を幅広く、かつ多量に発表しているひとでなければ、これはあたかも、停年退官のときの記念論集としても不思議ではないような性格が、いっそう目立ってくるであろう。

著者は、日本の技術史について多くの発言を行なってきた。その特徴は、あるいは強味は、いずれも京都あるいは日本の各地に、今日もなお生きている伝統技術・手仕事を調査し、作業場に入ることによって得られた成果によっているという点にある。技術史を文献によってのみ行なうときに生じる限界は、こうした生きた作業場のなかで手仕事のすぐれた工人たちの作業と、かれらの発する言葉に接することができる限りにおいて、この著者には打破されるものなのである。それがかれにおける日本の技術史を、いつもユニークなものとしてきた。文献への接近と、物ないし工人の作業場への接近がパラレルになされるというのが、技術史における著者の強い立場といえる。

ところが、中国の技術史の場合はどうか。それについては、あとがきに述べられている文章に、著者の告白を行なわせるのがよかろう。「わたしはある種のもどかしさを感じつづけていた。成都で現在作られているであろう弓すら目睹しえぬもどかしさである。景徳鎮の磁器窯の火の色を知らぬ虚しさである」「わたし」の置かれている場の限界のために、この書物の「諸論文のもつ大きな欠点は、現実の物と人（あるいは社会）をすべて捨象して」いるところにある。これが中国技術史における著者の弱味なのである。

中国の技術の影響の大きかったシルクロードの世界・インド・東南アジア（そしてもちろん日本の伝統産業）の手仕事の調査を何度も行なうなかで、このもどかしさが著者に生まれてきた。湿潤地帯に生きた人間が、技術史的マインドをもって乾燥地帯という自然を経験したとき、強烈にかれを襲った。「わたしがたえず問題としてきた

中国のうちの北半は、実に乾燥の世界で」あったのだ。それは、技術史（たんに技術史だけの問題ではなかろう）を構成しようとするものが、自ら経験しなければ克服できないギャップと言えよう。

しかし、日本と中国という対象におけるギャップは別にして、本書に試みられた興味ある一つの方法を紹介すれば、「景徳鎮の陶磁生産と貿易」（第一四章）に見られる、中国の史料だけでなく、ヨーロッパ人が経験した中国の物の記録等を利用している点である。いうなれば、中国における技術と歴史を多色的な光線のもとにおき、モノクローム的技術史像を脱却させようとする試みである。しかし、それでも虚しさ、もどかしさは、決して著者から払拭されないであろう。

（橋本　敬造）

会田雄次著『極限状況の日本人』

――会田雄次版軍人勅諭――

（B6判、二九四頁、学習研究社）

今、人目にたたぬところで、しかし確実に現代の刀狩りが進行している。細かな法規制の新設や改正を省略するが、少くとも昭和五十一年までには、ほとんど民間のライフル銃は姿を消すであろう。わずか一部の体協に属する国体クラスの競技選手か、害鳥獣の駆除を仕事とする人々などにしかその所持を認められなくなるのである。押収された銃器は向うがわに総て引きあげられ、そしてその向うがわでは、毎日人間を標的に擬した銃器の訓練が行なわれている。徴兵制を持たぬという慶賀すべき状況のなかで育った我々若者は、その事の良し悪しは抜きにして、こういうじわじわと寄ってくる締めつけをただ漫然と傍観するのみである。我々は自ら銃を取る必要がないことを只管願う懦弱な世代として選ぶと選ばざるとにかかわりなく生まれてきているのである。本書を、私はこうした世代への警醒の書として読んだ。そして案外、面白かったといっては失礼にあたろうか。

著者達は戦場で人を殺し、殺されるのを直視してきた。少なくとも我々が見ることもできぬ銃器を日常に扱ってきた。もはやそれだけでも懦弱であることは許されぬであろう。しかし著者がある種の望郷の念をこめて語ろうとするのは、より昔、日本が真の健康さを持とうとした明治時代、軍人勅諭が渙発されたその精神についてである。軍人勅諭の狙いは西欧諸国に伍して日本が近代国家としてたちゆくために、国民の結束を求めたところにある。その主張の多くは平凡な、それだけに普遍的な今日なお深く反省のよりどころとなるものである、と著者はいう。しかし、以後の日本の展開はその精神を十分に継承するものではなかった。軍人勅諭が初年兵を撲る道具になった時、すでに懦弱への道は始まっていた。軍隊が軍人勅諭を体現するものどころか、その虚構性を暴露するものであった一面、おもいがけぬところにその精神の実現を著者は見た。それは戦場の極限状況におかれた時の兵隊達のなかにである。軍人勅諭渙発の精神状況が心の第一のふるさとならば、著者の戦争体験は第二のふるさとである。

ふるさとに視座をすえて、現代日本を斜にかまえて切ろうというのが、この会田版

軍人勅諭の発想だろうが、冗談ではない。見たこともきいたこともない勅諭などふりまわされて、何か見知らぬ土地の県人会の会場にまぎれこんだらかくや、という気分。ふるさとをもたぬ若者にはともかく奇怪なことだらけである。尤もこの書にも随所にひかれるアーロン収容所の時はそんなことはなかった。アーロンとて我々にとってふるさとではないが、書き記された事実への共感に近い鮮やかな印象は忘れられぬ。ところがアーロンを手がかりに軍人勅諭まで行ってしまったら何をかいわんや。〝ふるさとは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの〟である。そしてこの詩の一節にはこうもあったと記憶する。〝よしやうらぶれて異土の乞食となるとても帰るところにあるまじや〟。

（熊倉　功夫）

上山春平著『歴史と価値』

（A5判、三四七頁、岩波書店）

大学に入った当時、ギリシャ古典時代のソクラテスから新しくはサルトルに至る西洋哲学史上の主要な哲学者の著作を今にして思えば全くの乱読としか云いようのないような読み方ではありましたが、かなり読んだ時期がありました。未知へのあこがれとともにある種の気負った自負心のようなものからであったと思います。しかし、哲学をこれから先までやろうなどという気のさらさらなかった私にとって、その一時期は一種のはしかのようなもので、社会科学関係の書はときどき必要に応じてひもとくことはあっても、じっくりとまともに哲学書を読むことはまれになっていました。したがって本書の書評を引受けたものの、久しぶりに見る哲学関係の書だけに通読（理解したかどうかは別として）するのにいささか骨のおれたことは事実です。

さて前置が長くなりましたが、本書はあとがきにあるように「歴史と論理の問題を統一的にとらえようとする視点」に基づいて、一九六〇年代の十年間にその成果として発表された十論文（但しそのうち二論文は七〇年代）をまとめられたものです。内容的には「歴史と価値」と「哲学と社会科学」の二部に分たれていますが、書名が示すごとく、上山先生の主たる問題意識は第一部にあるようです。そこではギリシャ古典哲学に始まり現代実存哲学に至るまでのさまざまな価値論が分析されており、とりわけ私としてはニーチェとフロイトを系譜的につないで考察されている部分に興味を覚えました。すなわち「意識」は派生的なものであって、人間存在の根源は「衝動」であるとするニーチェの哲学と、その観点を精神分析の分野で科学的に展開したフロイトの理論を伝統的価値論に対するアンチ・テーゼとして評価しておられる点、とくにフロイト理論を「人類の生存活動における三つの主要契機――主体的要求の契機、客観的認識の契機、社会的制約の契機――を総体としてとらえる視点を提出」するものと指摘されている点は私のようにフロイトとは即精神分析学者としてしか考えていなかったものにとってはその哲学史上の重要な地位を新たに認識させられた次第です。

それでは上山先生御自身の価値概念は何かというと、暫定的という条件つきですが「主体の生存に必要な選択作用における選択基準として機能する表象」（七二頁）という概念規定をされています。この概念規定について私などには十分に理解できたとは言えませんが、上に引用した人類生存のための不可欠の三つの契機と密接に関連したものであろうことは間違いなかろうと思います。素人の憶測を言わせてもらえるならば、ダーウィニズムと全く無関係ではないように思われます。したがって、第一論文第三章「現代価値論の問題点」で伝統的価値論のアンチ・テーゼの一つとしてダーウィニズムについての分析があればという気がしました。ただこの三契機の分類は説得力があると思います。もっとも私などはフロイト流に言えば社会的制約の契機のみが表層にあり他の二契機は深層意識下にあるのではないかと自問したくなりますが。

ところで最近の著作『神々の体系』（中公新書）やその続篇「続・神々の体系」（『歴史と人物』一九七三年一・二月号）など、私も大いに興味をもつ分野ですが、本書のような先生本来の専門分野のものに比して、何かはつらつとしたものを覚えるのは、私の哲学に対するアレルギーのせいだけでしょうか。文献学的方法を用い、歴史的背景を考慮しつつ論理的整合性を追求するという最近の先生の研究から想像をたくましうするに、どうもこのような方がお好きなようにお見うけするのですが。

（愛宕　元）

福永光司訳『列子』（『中国古典文学大系』第四巻）

（A5判、二三六＋九頁、平凡社）

ギリシア語で「ハパクス・レゴメノン」ということばがある。一つの言語の現存文献の中でただ一度しかでてこない語あるいはいいまわしという意味である。こうしたことばが西洋古典学のテクニカル・タームとして数えられるというのも、一つの語、一つのいいまわしの意味を確定するためには、その語あるいはそのいいまわしと類似のあらゆる例を探し求めるということが古典学の王道であるということを裏から証拠だてるものといえよう。

福永さんの列子の翻訳は、まさにそうした古典学の王道を行くものといえる。というのも、翻訳の部分よりも、注の部分の方が分量的に多く、しかもその注も、列子よりまえのすべての古典から縦横に引用されたものからなっているからである。

古典学というものは洋の東西を問わないものとみえる。例えば、アリストテレスをやろうと思っても、その前のプラトンを、そしてさらにはソクラテス以前の哲学者たちをきちんと知っていなければ、とんでもない誤解や、理解不足をしでかすものである。そうした意味で老荘を自家薬籠中の物にした福永さんが列子をやられるのは最適任者をえたものといえる。

ところで翻訳の方であるが、開巻第一ページのところで私は早くもつっかえてしまった。そこにはこうある。「万物を生成するものは、それみづからは生成せず、万物を変化させるものは、それみづからは変化しないのである。万物は……おのずから生

成し、おのずから変化……するのであって、これを何者かが意図的に生成し、変化……させていると考えるのであれば、それは間違いである。」（傍点山下）傍点を施した二つの部分、そして原文の「生物者」と「自生」は合理主義の私には矛盾しているようにみえたのである。そしてイギリス人グラハムが一九六〇年に出した列子の英語訳をみたところ、果せるかな、いま引用した部分の後の文は、他人の筆しかも反対的立場の人間のそれによると注されていた。とはいえ彼の意見は論理的なつじつまは合うかもしれないが、なんの典拠にも基いていない。

そこでもう一度福永さんの注にもどったところ、一見矛盾したようにみえる二つの文のそれぞれに、それと類似の文がともに『荘子』から引用してあった。そしてここから見れば、列子の二つの文は必ずしも矛盾したものではなく、十分共存しうるものであって、矛盾すると感じるのは合理主義的、いなむしろキリスト教的な立場からの偏見であり、そうした二つの命題の共存にこそ、『荘子』さらには『列子』の思想の本質が存するのだとも思えたのである。

このように私はつっかえつっかえしながらも、大へん有益な引用注を頼りにゆっくりと読み進んでいるのである。

（山下　正男）

島田虔次編輯『荻生徂徠全集』第一巻

（A5判、六五三頁、みすず書房）

『荻生徂徠全集』第一巻、「学問論集」。これは近来の出版界では異例の本であり、とてもわたしが「評する」などということはできない。徂徠について、最近、続々と復刻されるようになったことは御承知のとおり。岩波版『日本思想大系』第三十六巻の『荻生徂徠』、また河出書房新社版の、みすず版とはがらりとおもむきをかえた『全集』の発刊とつづく。岩波版は七三年四月、河出版は二月の刊、つづいて島田先生の編になるものが七月と並んでくる。岩波『日本思想大系』には、別に『徂徠学派』も一本として刊行されている。

河出版、岩波版がまず読下しをかかげてのち、資料のように原文をポイントをおとした活字で組むのにたいし、今度の『全集』はまず底本を写真製版によってかかげ、のちに読下し文を加える、といった編輯は特異であり、かつ、その読下しに一切余計な注が加えられないのも編輯のありかたを激しく示しているとしか思えない。

外国語を中心に学んだわたしの世代は、漢文を読む必要にせまられても、ほとんど読めない世代に属している。何回か勉強しはじめては挫折しているうちに、大きい出版社は、次々と読下しを中心にした全集や、ひいては現代語訳をもって読者へのサービスとする風潮が進行してきた。サービスがわるいとは決して思わないが、さて、それで徂徠が理解できるかといえば、わたしは立ちどまった。「徂徠先生学則」一編についてだけでも、岩波版の西田先生の読下しと、島田先生のそれとは、微妙に、かつ重要な点で違ってきている（岩波版、一八八ページと、みすず版八八ページほか）。

また岩波版には、きわめて多くの頭注、

補注がついているが、みすず版には、ほとんどといっていいほど注がない。一例をあげよう。

「古之時楚雖二大邦一。其左史倚相所レ為レ誦。三墳五典九丘八索之書。舎レ是無レ為レ学。……」

ここで岩波版はほぼ各単語ごとに注がつく。注を読みつつ、何となくわかったような気がしていたといえばいいすぎか。しかし島田先生は一切こうした立場をしりぞけられ、正確な復刻にエネルギーのすべてをそそがれているのだ。先生は「解題」にしるされる。「一読してあきらかなように、学則はおそるべく難解な文章である」と。わたしたちは、この難解さを避けて通ってきていたとはいえないか。怠慢になれていすぎてはいなかったか。今度の『全集』第一巻を何回か読みかえすうちに、避けて通ることのできない道が無限につづくことをいやおうなしに思い知らざるをえなかったのである。テクスト・クリチックの持つ意味、その正確な読み、ここから、本来のわたしの勉強もはじめてゆきたいと痛感せざるをえない今日このごろである。

（飛鳥井雅道）

渡部徹ほか編『堺市史』続篇　第二、三巻

（A5判、一一二〇＋一〇頁、九七八＋一六五頁、堺市役所）

私が大学へはいった前年に故三浦周行先生の『堺市史』正篇が完結して、名著の誉が高かった。その後に編入された新市域の歴史を説いた続篇第一巻が出て、こんどの第二・三巻は、正篇で扱ってない大正期から現在までの半世紀あまりの歴史である。第二巻第一編「大正―昭和初期」の担当は渡辺徹・松尾尊兊、第三編「戦時下の堺」は江口圭一、そして戦後を扱った第三巻は渡部氏が総編修である。現代史であるから、新聞や市役所の記録などが主要材料となる。そして筆者が筆者だけに、官製歴史であまり扱かわない労働運動や水平運動の記事も詳しく、それによって巨大都市大阪と和泉・河内のヒンターランドとの間に挟まれて、そのヒンターランドが堺の頭ごしに大阪と結ばれてしまい、いわば中途半端な立場におかれた堺の苦悩がよく書き現わされている。昭和初年の不況期、つまり私が堺住吉に住んでいた時期には工場数や生産高ばかりでなく、人口まで減少していたのには驚いた。従って財政の苦しさも一通りでなく、それから脱却するための悪あがきが、金岡への連隊誘致のていどならまだしも、大浜の埋立からはじまって、大コンビナートの誘致へと、言うなれば自殺行為の道を歩む。

そんな固い話ばかりでなく、堺のことだから与謝野晶子や河井酔茗から坂田三吉らについてももちろん語られる。堺市歌は安西冬衛の作詞であり、そしてこの詩人が十八年間、堺市役所の吏員をつとめていたことも、この『市史』ではじめて知った。

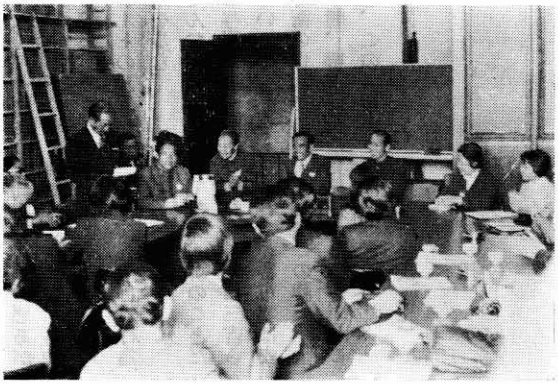
（藤枝　晃）

お客さま

中日友協訪日代表団

日中国交回復以後、両国間の学術交流にもやや活発化のきざしがみえはじめたが、折もよく、本所の代表団が中国を訪問している最中に、中日友好協会訪日代表団（廖承志団長）が来日された。四月十九日の所員会では、北京大学教授周一良らの来所が可能ならば、所として正式に迎えることが決められ、その翌日には在上海の河野団長から国際電話で北京大学でお世話になった周氏らの歓迎方を要請してこられるというようなこともあった。

結局、四月二十八日午後に来所されたのは于会泳副団長以下十名。会場を二つに分け、周一良・王芸生・賈蕙萱の三氏は歴史部門に、于氏と謝冰心・浩亮・張瑞芳・薛菁華・李炳淑・徐鴻道の七氏は文学芸術部門に参加されることになった。



歴史部門の参会者は約七十名。周氏から、中国歴史学界の現状について報告してもらい、王氏からも挨拶をうけ、その後簡単な討論を行った。その大要は、文革後も社会科学の全分野にわたって「闘争・批判・改革」が行われているが、歴史学の分野では、歴史創造の原動力たる人民大衆の立場に立つ歴史学の確立がはかられている。そのさい、人物評価にあたって、たとえば秦始皇帝などについてもその積極的側面をもあわせ評価している。ただ目下もっとも力をいれているのは新しい教材の編纂にたいしてであ

って、試作的なものはかなり出来つつある、ということであった。つまり、社会主義にふさわしい歴史学を確立すべく奮闘中の実情をきわめて明瞭な言葉でたいへん率直に語られたわけであって、参会者一同、今後一層の学術交流の発展を望んで会をおえたのである。（右上図―報告をする周一良氏）

文芸部門の集会も、同様に、各団員から文革中、並びにそれ以後の文学、音楽、映画、舞踊等の各分野における改革の状況が語られた。（右下図―文芸部門の集会）　（狭間直樹）

中華人民共和国出土文物展代表団

標記の出土文物展が京都国立博物館で開かれるに先立って、同展代表団の王冶秋団長以下の一行の京都訪問に際して、六月一六日夕七時より九時半まで、一行を当研究所本館に迎え、本所関係者及び文学部、そのほかの人たちが参加して、王団長から中国文物研究の新しい動向――辺境考古・地震考古・水文考古――それに馬王堆古墳の老婦人の病理解剖の話などを聞いた。

会のあと階上東洋学文献センター閲覧室でささやかなビールパーティを開いた。（下図右端が王氏）

なお、王氏は一九六五年「永楽宮壁画模写展」のために来日したときにも来所したことがあり、こんどが二度目の来訪である。

一行は左の通り――

団長　王冶秋（文物局）
副団長　賀亦然（広西局）
団員　宿　白（北京大学）、史樹青（歴史博物館）、郭勞為（文物局）、羅哲文（文物局）
通訳　董徳霖（対外友好協会）
工作団員　高至喜（湖南省博物館）

また、展覧会が開かれてからの八月三一日午後に、同展工作団員の趙光林（北京文物管理処）、李長慶（陝西博物館）、楊林宗（通訳）の三氏が来訪し、所内の有志と会談した。（林）

ソルンツェフ氏

ソ連科学アカデミー東洋学研究所次長ソルンツェフ氏（言語学者）が六月二六日午後に本所を来訪した。ちょうど私の文学研究科の授業の時間にあたっていたので、その学生たちを交えて会談した。話すうちに一九七〇年のストックホルムでの国際漢学会議に同席していたことを互に思い出した。やはりその会議に出ていた西田龍雄教授と語りたいと、大雨の中を同氏は文学部の同教授の研究室に向って去った。　（藤枝）

この二年間

――日本における市民文化の形成――

熊倉功夫

共同研究のうごきとしてわが研究班の動向が報告されたのは、『人文』のバックナンバーを繰ってみると昭和四十六年末に発行された四号が最後である。班員の赤井達郎氏が書いておられる。内容をみると、同年十一月末に開かれた煎茶会の予告があり、実現したら会の報告がいずれあるだろう、と記している。それから約二年、まずその報告からはじめよう。

煎茶会は今おもいだしても大変楽しい会であった。天気にめぐまれ、秋の風情深い清風荘の庭、小川可楽ゆかりの道具、金沢から届けられた蕪鮨に胡桃の飴煮、菓子は中津川すやの栗きんとん、まことに結構な趣向で、化政期の文人の世界を再現できた。あらためて班員の小川宗匠に御礼申しあげる。奇しくもこの十月には、宗匠の家元襲名が行なわれるという。

明けて四十七年正月には化政期を中心としたコレクションの見学を吉岡新一氏を迎えて行なった。一つはほぼ化政期ぐらいから急速に展開する鉄砲。もう一つは国貞・英泉などの浮世絵である。吉岡氏の日本有数の鉄砲コレクションの御説もさることながら、老若わけへだてなく、保存のよい浮世絵に人気が集まったのは已むを得ない。まことに眼の正月であった。

年度がかわって季節がよくなると、またぞろわが研究会はどこかへ行こう、という話になる。五月吉日を選んで打揃って出掛けたのは西陣の万亀楼である。生間流の包丁を見ようというのである。うかがうと当研究会の趣旨をよく御理解いただいているから酒肴などはでてこない。まず史料がずらりと運びだされる。包丁道の秘伝書、あるいは献立帳、礼法書が多い。次に運びだされたのは室町時代後期ごろからの包丁、箸の数々である。これをためつすがめつ眺めたところで居ずまいを正し、いよいよ包丁式である。水干に烏帽子をつけた当代があらわれ柳の大まないたに鯉をすえ、たちまちのうちに岩間におどる滝上りの景色に調理したのはまことに見事であった。包丁式のあとは手籠弁当を頂いてお開きとなった。

こう次々と書いてくると、そうでなくても誤解を招きやすいわが研究班を見る目をますます誤まらしめることになならないか。

個々の研究報告は彙報にみて頂くことにして、来春刊

行予定の報告書の原稿もぼつぼつ集まり、この九月から、第二期に入ることになった。テーマは第一期の化政文化をうけて幕末の文化である。しかしまた季節もよい。この秋には山紫水明処からはじめて頼山陽、三樹三郎の跡を訪ねようかという話になっている。実現したらまた報告をしよう。

語類の会読

——朱子研究——

三浦國雄

小説のおもしろさはそのディテイルにあるという説があるが、全く同感で、それは何も小説だけに留まらず、人間の思想的営為の証としての著作一般についてもいえるはずである。『三四郎』に「日本より頭の中の方が広いでせう」というセリフが出てくるけれども、まことに人間の精神という代物は、何々主義で括るには余りにも複雑怪奇なものであるらしい。

今、我々が三年前から会読を進めている『朱子語類』百四十巻は、朱子の思想の精華、あえていえばそのダイジェストである『四書集註』などに比べて、この十二世紀の巨人の多様な関心を伝えている、いわばディテイルの集積である。

こういう書物の解明には、共同研究という形式が最もふさわしいのは申すまでもなく、巻一——巻六の基礎教程を終え、その思想の輪郭と特異な文体にもやや馴れてきた我々は、いまその尖鋭な異端批判である巻百二十五（老荘）、百二十六（釈氏）と読み進んでいるけれども、この研究会は、ひとつの巨大で精緻で多彩な精神に、異なる資質をもった集団が対峙すればどういうことになるかというひとつのモデルのような気がする。語録の世界は、特定の門人の質問に師匠が答えるという形式をとっている以上、不特定多数の読者を予想した著述の、いわば普遍的な言語空間とはおのずから異質であって、そこにあるのは、固有名詞で呼ばれる弟子と、その場その時とに制約された閉鎖的な言語空間であり、そこに却って思想家の肉声があらわになる半面、そのコミュニケーションのはるか埒外にある我々にとって晦渋となるのは当然であろう。その難解さ、飛躍、乃至はその空白は我々の想像力で補うほかはないわけで、その補填の仕方に各人特有の傾向性というものがあることに最近ようやく気付きはじめた。それは一見何でもない一行のセンテンスの解釈の仕方にも仄見えることがあり、いかに人は多様であるか、いかに人はおのれの体系から離れることがで

きないか、このあたり前の公理を今更のように思い知らされている。我々は朱子を読みつつ、同時におのれ自身の思想の襞をも読んでいるのである。これは読書という営みに必然的なディアレクティークであり、主観的解釈などというものとはおのずから別の問題である。複雑怪奇なのは朱子だけでなく、実は読み手の側の我々自身もすでに一個の迷路なのである。

フランス第二帝政期の研究

樋口謹一

共同研究プルードンの報告書が形態をなしていくプロセスでのことである。班長の河野さんをはじめとして、この巨大なジャーナリスト学者の後半生にあたるフランス第二帝政期をあらためて見直す必要がありそうだ、という考えをもつものが出てきた。

わが国の史学界では、一八四八年の二月革命と一八七一年のパリ・コミューンとには、わりとスポット・ライトが当てられてきたが、この二大事件にはさまれる第二帝政期は、まだまだ日陰の身をかこっていると言えはしまいか。

『共産党宣言』と年を同じくして、全ヨーロッパを革命の波でおおった発端となった事件の後始末ないしは反動として、でなければ、コミューンなる人類史上初の試みの前史として、言わば副次的に採りあげられるのみで、第二帝政期それ自体のもつ価値はあまり認められてこなかった、と言ってよい。

ルイ・ナポレオンの〝ブリュメール一八日〟が二番煎じの茶番にすぎない、という、かのマルクスの判決がこのクーデタを始点としてもつ第二帝政期そのものへも押し及ぼされた、という事情も、これに作用しなかったとは言えぬかもしれない。

目をわがフランス文学界に転ずると、フロベール、ボードレールの研究は、汗牛充棟といってもいいほどの蓄積をもつ。ところで、『ボヴァリー夫人』と『悪の花』とは同時に帝政権力の検閲の網の目にひっかかっているのだ。この事実に含蓄される意味はもっと深められてしかるべきではあるまいか。

この時期が一九世紀フランス最大の経済成長期であり、その祝祭として二度のパリ万国博がもたれたこと、インドシナをはじめフランスのアジア植民地経営が緒についたのもこの間の現象であること、前世紀、今世紀それぞれ中葉のナポレオン三世とドゴール大統領とは、あ

い対応し、あい照応するいろいろの性格をもつこと、フランス・カトリック教徒の現代最大の聖地ルルドの縁起たる聖母マリアの奇跡が、そしてまた〝教皇不可謬性〟の信仰個条の確立が、この時期の末に胚胎すること、などなど……。

こう考えてくると、第二帝政期の文学史的研究と社会史的研究とのあいだの跛行現象の是正は、けっして過去のみにかかわる迂遠の閑事業ではありえまい。どんなパースペクチヴがひらけてくるか、なかなか楽しみですらある。

東洋学文献センター

昭和四八年度漢籍担当者講習会

昨年に引き続き、文部省学術局情報図書館課と本所付属東洋学文献センターとの共催による第二回講習会は、七月二日から七日まで、京大数理解析研究所を会場として行なわれた。日程は下記の如くである。聴講者三十五人。実習指導員としては、講師とともに本所の荒井健、永田英正、荒牧典俊、愛宕元、今井清、三浦国雄、東京大学東洋文化研究所の池田温、田仲一成、陳明新、沢谷昭次の諸氏が当った。第四日目の龍谷大学図書館見学においては、同館の特別の御配慮によって、大谷探検隊関係資料と貴重漢籍とを展覧させていただき、館の歴史について堤玄立次長より説明あり。なお西本願寺の書院、飛雲閣を拝観した。

第一日
開会にあたって　河野健二
漢籍について（講義）　吉川幸次郎
京大人文科学研究所漢籍分類目録について　倉田淳之助

第二日
経部書　平岡武夫
史部書　梅原郁

第三日
東洋学文献センターの現状と将来　日比野丈夫
子部書　日原利国

第四日
集部書・叢書　市原亨吉
竜谷大学図書館見学
大谷探検隊について　井ノ口泰淳

第五日
新学部書　竺沙雅章
和刻本について　長沢規矩也

第六日
討議及び情報交換　（司会）日比野丈夫

研究ノート

「改造」思潮と右翼

古屋哲夫

雑誌『改造』が創刊されたのは、一九一九年（大正八）四月であるが、「改造」という言葉はこの時期には論壇の流行語になっていた。そこでこの流行の根拠を探ってみると、どうやらウイルソンの十四か条やパリ講和会議が、その結果がどうあるにせよ、ともかく「世界改造」の試みとしてうけとられたことにあったようである。例えば、村川堅固は「世界改造の史的観察」と題して、第一次大戦の国際関係を概観しているし、中野正剛はパリ会議の論評に「世界改造の巷より」という題名をつけている。

勿論この用語の使用者が、パリ講和会議で世界改造が実現されたと考えていたというのではないが、しかしロシア革命の成功もあり、世界が「改造」の方向に動くであろうとの予感は、この時期に多くの人々を捉えていたように思われる。そしてそこから、国内の改革も「改造」という言葉で論議されるような風潮が生れた。それは一面では、民主主義や社会主義の思想を広めてゆく基盤となったが、反面では、右翼思想に新しい展開をうながすきっかけをも与えた。国家主義者たちの間からは、世界改造にみあうような、壮大さと激しさをもった新しい使命感を求める動きが始まってくるのである。そしてこのような動きのなかから、北一輝と大川周明が新しい右翼のリーダーとして押し上げられてきたとみることができる。

・

北と大川の思想は、種々の面で異っているが、その発想における次のような共通点が、改造思潮の下での右翼の渇望を満たし得たのではないかと思われる。第一は、世界の不正義に戦闘的に対決することを、自らの「正義」の根拠とする点である。インドに於ける植民地支配に眼を向けた大川と、中国に対する金融的支配をとりあげた北とは、大英帝国の解体という結論で一致した。そして日本の植民地支配は、その戦闘性の故に免罪されるという仕組になっていた。第二は、日本の特殊性の強調であり、日本の「天啓的使命」を説く北と、天皇を中心とする日本文明の力を強調する大川とではだいぶ語り口が異っているが、西欧的価値を否定する点では共通していた。第三は、国内の不正を除去しなくては、世界に「正義」を唱える資格なしとする点であり、この点の戦闘性が彼等をのちの日本ファシズムの先駆たらしめたのであった。

ともあれ、一九一九年という時点でこの両者が握手し、その思想が一定の影響力を持ち得たことは、「世界改造」とい

う観念が多くの人々を捉えていたという情況を抜きにしては考えられないのではなかろうか。

深層論理と表層論理

内井惣七

記号論理学が扱う形式的言語とわれわれの自然言語との間には大きなギャップがある。そこで、記号論理学で成立する「論理法則」は果たして日常言語レベルでも成立するのだろうかという疑問が生じるであろう。例えば、現代の論理学の中心的地位を占める古典的二値論理学の前提となっている排中律「すべての命題は真あるいは偽である」を考えてみよう。この法則に対する日常言語レベルでの反論はつぎのように行われるであろう。

いま「現在のフランス王はハゲである」という命題を考えてみよう。この命題およびその否定「現在のフランス王はハゲではない」は、ともに「現在のフランス王」が存在するという前提のもとでのみ真か偽かでありうる。ところがフランスには王は現在存在しないので、どちらの命題も真偽いずれでもないと結論するのが妥当である。すなわち排中律は成立しない。

わたしはこの例のような問題が生じるのは、記号論理学の法則があまりに単純・厳密すぎるためではなく、むしろ日常言語レベルでの文が表面的な構造（表層構造）にみられるよりもはるかに複雑な意味（深層構造）をもつからだと考えている。そしてある文の意味の構成要素としての命題については記号論理学の法則が成立し、さらに日常言語レベルでの論理法則の複雑さは深層構造の複雑さでもって十分説明できると考えている。このような立場はもちろんチョムスキーの生成変形文法の考え方と軌を一にするものである。

そこで、さきの例をこの考え方で処理してみよう。問題の文は、深層レベルにおいて少くとも二つの構成文をもつ。ひとつは「現在フランス王が存在する」という前提に対応し、もうひとつは「彼はハゲである」という主命題に対応する。前者を副構造、後者を主構造とよぶことができよう。もし前提が偽であれば、主構造の主語は指示対象をもたないので、主構造はそもそも真偽となりうる命題を表現してはいないことになる。したがって、副構造と主構造は二つの同格な文として並べられているのではない（ラッセルの記述理論が不都合なのはまさにこの点においてである）。

以上のような分析は、それが単に叙述文のみならず、命令文や疑問文にも適用できることによって説得力を増すのである。例えば、「戸を閉めなさい」という命令は戸が開いているという前提のもとでのみ力をもつ。このことから、この文は副構造としてこの前提をあらわす文を、そして主構造として命令法の文をもつことがわかる。同様に、「あなたは奥さんをなぐるのをやめましたか」という疑問文は「あなたは奥さんをなぐっていた」という前提を副構造としてもつ。

しかしこのような分析に基づいて表層論理を深層論理で説明するためには、深層論理の枠組として従来の記号論理がもつ以上の表現手段が必要である。そして近年盛んになってきた哲学的論理学の研究がその必要を満たしつつあると思われるのである。

「文件」の生態

竹内　実

現在、季刊『技術と人間』一九七三年夏号以降に、拙訳によって連載中の「炉前の闇」の原題は「内部問題」といい、作者は労働者作家といわれている胡万春（フー・ワンチュウン）である。原題が示すように、十余年前、毛沢東の「内部矛盾」演説のまもなくあとに書かれた。

訳していて、オヤと思ったことがある。それは、作中に登場する反革命分子が、あとで騒動を起す目的で、新しい操作方法（この小説は製鉄所が舞台で、平炉の操作改善をめぐって作中人物のうごきが展開している）についての計算をやり、その原稿を秘書のような役をしている女性に保存を命じるところである。

「えっと、黄、この資料を保存文書扱いにしてくれ」

原文は、「喏！　小黄、这份資料爾拿去帰檔吧」である。「檔」はこの場合、書類戸棚で、あとのほうで、『文件橱』としてでてくる。これが、ただ、戸棚にしまっておけ、という程度の意味でないことは、この原稿をうけとった女性が不審におもって問いなおしていることからもあきらかで、引用した原文にもみえるように、『帰』という動詞を使っている。

ひとつの原稿が公的なものになる、その瞬間というか、メカニズムの場面である。製鉄所のような、ある意味ではなりふりかまわず生産だけをあげていればよい場所でも、ある文書が公的なものになるかどうかが、重要な意味をもっていることが、小説の一シーンから、かいまみられた。

林彪事件についても、似たような文書の扱いがあるようである。そしてひとつの文書が公的なものになるについては、いくつかの段階があって、一般に配布されるまでは、特定のグループだけしかそれを引用できないようである。ある表現がしばらくして、突然ゴシック体になり、毛沢東の言葉だったとわかる（これについては、拙編訳「林彪事件の真相」・解説、『中央公論』一九七三年二月号でふれた）。

中国でいま使われている「文件」の二字は、どうも原文のままでしか日本語化できないようである。それは、中国における文書、文章――もっと端的にいえば、文字というものが事実を指示するだけに終らず、事実そのものと化していることのあらわれではないだろうか。生起する「事実」とは別個に、「文件」そのものが事実と同じ比重をもつにいたっているのである。いわば、「文件」はそれ自体の誕生と死滅があるのだ。こうした「文件」の生態が、現代中国のなにを意味しているのか、歴史的にも考えてみたい。

旅

ヴェルサイユ批判

多田道太郎

一九六七年、フランスに行ったとき、ヴェルサイユは素通りした。パリからブルターニュまで、一路、くるまを運転して走ったのである。パリを出るとすぐヴェルサイユにかかる。これが音にきくヴェルサイユかと思った。観光客はかならずここを訪れるという。しかし私は観光客ではない、という気負いがあって――というより、馴れないフランスの道路に気もそぞろで、ヴェルサイユを素通りした。

こんど（七三年）はたまたまヴェルサイユから歩いて二分というところの知人宅に泊めてもらった。嫌でも毎日、ヴェルサイユに通う破目になった。数日にわたって、ヴェルサイユの庭をぶらぶら見て歩いた。もう二度とこういう機会はないだろう。

アラン・レネに「去年マリエンバードで」という映画がある。埴谷雄高氏によると世界最高のフィルムだという。これを、これも偶然、こんどシネマテークで見ることができた。ロケは、これも因縁めくが、ヴェルサイユでなされたという。映画を見て、ヴェルサイユを見て、そして映画の画面を回想した。

宮殿前のテラスから南を見はるかす。「緑のじゅうたん」がつづき、そのさきに「アポローンの大池」が見える。その向うに大運河がひらけ、遥か地平線の彼方まで、眺望はつづく。一つの権力意志が、あらゆる邪魔物をしりぞけ、「無限」につながってゆくのである。左右の森（ボスケ）と大理石の彫像は王者の意志を護衛する臣者の忠誠の表現である。ル・ノートルのもつ構図が絶対主義の美的表現であることは言うまでもない。

テラスを降りたところに「ラトスの大噴水」がある。カエルや河馬といった「下等動物」が地面にはいつくばって水を噴いている。これは宮廷ヨーロッパを守る労働者、植民地人の屈従の姿勢である。中ほどの男の像は上に向って手をさしのべている。その上に女神が舞うている。これが絶対平和の構図なのであろう。

こういう権力意志の構図のシンドサに、いかにきびしく耐えるか。そこに王者の、そしてヨーロッパの支配者の「気品」がある。「去年マリエンバードで」はこの気品の最後の表現であった。すでにマリ・アントワネットはこの構図に耐えられなくなって、田舎風のアモーを作り、そこに憩うたのだが、この逃避の美学には、桂離宮はおろか詩仙堂ほどのきびしさもない。

ドイツ観光客のガイドは、ヴェルサイユのテラスの上に立って、誇らかに「カルテジアニスムス、ラチオナリスム……」と叫んでいた。ドイツ人たちは感心して見とれていた。

〝オリエンタリスト〟の会議

川勝義雄

第二九回国際東洋学者会議は一九七三年七月一六日から二二日まで、ソルボンヌとコレージュ・ド・フランスを会場として開かれた。私は幸にもその機会に、まる八年ぶりでパリの土を再びふ

むことができた。ドミエヴィル先生をはじめ、ジェルネ氏・スワミエ氏・ホルツマン氏らフランスの学者たちと旧交をあたためることができたのが、私にとって何よりも有難いことだった。

会議は何しろ広大なオリエント全域を対象とする。九つの部会に分かれた中の一つ、スワミエ氏の主宰する「古代中国」部会が私に関係する部門だが、その中でも同じ時間に二つや三つの小部会が異った場所で開かれる有様だったから、全容を把握するのはまず不可能である。会議が終った直後、ヌヴェル・オブセルヴァトワル誌に、括弧つきの「〝オリエンタリスト〟会議」と題して、ちょっとショッキングな記事が出た。冒頭からしてこうである。

「この企画は馬鹿げたものに見える。東京から、ロサンジェルスから、ジャカルタから、フランス語とは最も縁遠い国々の専門家・学者たちを三千人近くも、ただ一つ、かれらが〝オリエンタリスト〟であるという理由で集めるこの企画は。

そもそも〝オリエンタリスト〟とは何か。エチオピアのアルファベットの専門家か？　フィリピンの潅漑史を研究する学者か？　イランの考古学者か？　五日や六日間、かれらが一しょに暮らしたところで、どんな共通項の上で新しい発見が生みだされるというのだろう……」

一八七三年パリで第一回の会議が開かれてからの百年祭、ソシエテ・アジアティック創立とシャンポリオンのヒエログリフ解読との百五十年祭を兼ねて行なわれたこの会議も、その〝オリエント〟がとてつもなく大きく、混沌としてしまった今日、これを解体して、もっと特殊化する時機が来ているのでないか、と、その雑誌には書いてあった。その問題は、会議の委員会でも討論されたと聞いているが、むこうの雑誌はなかなか手きびしい。

このような大きな国際会議に出たのは、私にとって始めての経験であったが、まとまりの点では、たしかに以前に出たことのあるジュニア・シノローグの学会の方がまさっていた。この種の会議の最大のメリットは、多くの学者に会って相互の交流と理解を深める機会が、提供されることにあるだろう。オーストラリアのクレスピニー氏をはじめ、名前だけ知っていて、面識のない学者たちに会えたのが、私にとって最も有難いことだった。ただ今回もまた、中華人民共和国の学者は参加しなかった。折しもパリでは、日本と同様に出土文物展覧会が開かれて、目を見張る逸品が展示されていたにもかかわらず……。

提謂経あれこれ

牧田諦亮

六十日間のパリ滞在中の日曜・祝日を除いてほとんど毎日を、国立図書館の東洋部閲覧室で過ごした私の最大の関心は、従来の疑経研究をさらに進める上で、ペリオ蒐集の敦煌古写経がいかに貢献し得るかにあった。そのため、二〇〇一号から五五七九号にいたるペリオ蒐集のほとんどを順を逐って閲覧させて頂いた。聞いていたよりは好意的に毎日数十巻の古写経が、こちらの希望するままに書庫からはこびだされて、No.8の机上におかれる。必要事項をメモしたり、経文を書写したり、撮影依頼写真の適否などを判断したりなどして、件数で百点、二千枚近いリストを出して撮影を依頼しておいたが、いずれ写真の到着するのは明春以降に

なる。したがって、ほんとうの研究はそれ以後になるが、そこまでは待っておれないので、書写した資料も一二〇頁のノート四冊になった。竜谷大学図書館やスタイン本、ペリオ本に見える、いわゆる西漢金山国皇太子という人の願経なども、ペリオ本だけをみても、P・三一三五の四分戒（残）にも弟子索清児の願経で、その願文は、金山国皇太子と同文であり、どうも既製の写経に（おそらく売経所で買ってきて）願文だけを書き入れたもののようで、金山国皇太子願経と索清児願経との類似性も考えられ、将来、これも研究の対象として改めて見直す必要もあろうか。古文書鑑定は、私の業とするところでないので、六十日のパリ国立図書館通いの中では、提謂経の佚文を採収したことが今日までのところでは、一番印象に残るものである。すでに三十二年ものむかしに、塚本善隆先生は、法苑珠林その他から二十一条の提謂経佚文をあつめて、「支那の在家仏教特に庶民仏教の一経典――提謂波利経の歴史――」を東方学報（京都十二―三）に発表された。北魏末期の仏教復興期に経典の散佚を慨いて、時代に相応した中国人向きの経典を曇靖が撰述した、この提謂経についての長論文である。僅か二十一条の提謂経の佚文をあつめることは、大変な作業であったに違いない。当時はまだスタイン本の目録もできておらず、塚本博士は、敦煌本の存在を将来検出されるときがあるかも知れないと予測しつつ、まだ敦煌本そのものについては、検索のよすがもないままに。二十七年を経て、私はスタイン本（S・二〇五一）に提謂経巻下（残）を見て、従来未見の提謂経が、安世高訳とされている分別善悪所起経と類似していることなどをふくめて、疑偽経典成立史上にも興味ある問題であるとして、発表したことがある（昭和四十三年、四十六年の仏教大学大学院研究紀要一、二）。今回のパリのペリオ本調査の過程で、P・三七三二（仏書、属於戒律類、無書題）と王重民氏が記録している、一行十七字（前後）詰、五百二十一行におよぶ相当長い経巻が、スタイン本（約四百行）とは別本の提謂経の残巻であることが知られた。陳垣の敦煌劫餘録に記録されている提謂五戒経并威儀というものは、スタイン本提謂経と同本で、提謂経巻下にあたるもので、それに修行実践のための五戒威儀が附されているものである。かくして、今日では二巻本提謂経の巻下（残）と、別本の一巻本提謂経（巻首欠）の存在があきらかとなり、塚本博士の二十一条の提謂経佚文とは比較にならぬ、提謂経の全貌を窺うに足る重要な資料が提供されることとなった（ペリオ本提謂経の全文は今年十一月出版の藤原弘道教授古稀記念論集に掲載される）。新資料を学界に提供するということは非常な困難を伴なうのにもかかわらず、これは資料の羅列にすぎないというような、無責任な批評の対象となりがちである。しかし、提謂経の一例のみをみても、塚本博士はわずか二十一条の佚文によってあの大論文をものされたが、今日、スタイン本・ペリオ本の提謂経本文を検討してみると、相当な冒険であったことが知られる。仏法東流記とか、漢法本内伝とかの、いわゆる書写時代の仏教史の資料についても、十分に検討すべきものがあることはいうまでもない。ともあれ、一つの論文のテーマとしてとりあげた経典が、まだ完全ではないにしても、三十二年の後に、さきの研究をさらに大きく前進させるものとして、ペリオ蒐集の中から、紹介されることは、塚本博士にとっても、やはり喜びの一つではないかと憶測する次第である。

書いたもの一覧

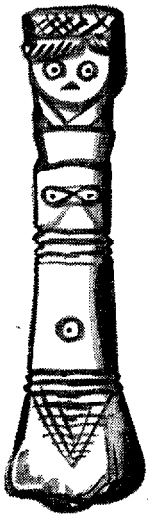
一九七三年三月～八月
（五十音順、◉印は単行本）

会田雄次

◉ルネサンス（『新書西洋史』四巻）　講談社　七月
◉日本人の生き方　富山県教育委員会　八月
◉事実と幻想　講談社　八月

飛鳥井雅道

松本清張の世界（『講座コミュニケーション』四巻）　研究社　三月
書評・『ロシヤ思想家とヨーロッパ』　朝日ジャーナル　四月二〇日号
宮本研における〈明治〉　大阪労演　四月
歴史の根底から・『天皇の世紀』　朝日ジャーナル　五月一一日号
書評・『アジアの革命家・片山潜』　朝日新聞　五月七日
文献案内・ドイツチャー『スターリン』他（『スターリン時代』）　平凡社　五月
うらから見た明治維新（対談・森谷尅久）　季刊京都　二号　七月



◉『日本社会主義運動史論』（共編・渡部徹）　三一書房　八月

荒井　健

印刷芸術　図書　四月
「猛回頭」抄（訳）　飈風　六月

井上　清

「いわゆる北方領土問題について（上・下）」　月刊毛沢東思想研究　六月～七月号
「人民の大学・人民の学問」（I・II）　東風　七月～八月号

井上忠司

◉都市における家族の生活（共編）　人文研　三月
イタリアの旅から　季刊人類学　四巻三号　八月

飯沼二郎

体験的「市民運動」論―八年間の総括―　ベトナム通信　六一号　三月
◉見えない人々―在日朝鮮人―　日本基督教団出版局　四月

日本的農業の「原点」に立て　技術と普及　五月号
人質の意味をめぐって—金嬉老のつきつけたもの—（座談会・鶴見俊輔、小野誠之、高史明、大沢真一郎）　朝鮮人　九号　五月
市民運動は市民的自由の追求だ　べ平連ニュース　九二号　五月
我が著書を語る『見えない人々』　出版ニュース　五月下旬
書評・呉林俊『日本人の朝鮮像』エコノミスト　六月一二日号
京都べ平連八年間の歩み　べ平連ニュース　九三号　六月
アンダルシア紀行　未来　六月号
京都べ平連の遺産（上・下）　共同通信系各紙　六月上旬
『見えない人々—在日朝鮮人—』を出版して　興文　六月号
書評・東畑精一『農書に歴史あり』農林図書資料月報　七月号
民族の盛衰と農業技術（対談・岸田義邦）機械化農業　七月号
四月の定例デモ　ベトナム通信五・六・七月合併号　八月
昭和史の底を流れるもの　読売新聞　八月一六日
朝鮮に写った日本人の顔　毎日新聞　八月一六日
日米首脳会談と今後の農政　朝日新聞　八月一七日
三・一事件と日本組合教会——特に渡瀬・柏木論争について（同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会編『日本の近代化とキリスト教』）　新教出版社　八月

今井　清

◉白氏文集巻三十八・四十一・五十二・五十四・六十五・六十八・七十（共編）　京都大学人文科学研究所　三月

内井惣七

Inductive Logic with Causal Modalities : A Probabilistic Approach (Abstract), in *The Philosopher's Index*, 1972. Bowling Green, Ohio, 1973.
倫理判断の普遍化可能性について（昭和四十八年度関西哲学会発表要旨）　関西哲学会　八月

梅棹忠夫

庭に退避して——私の書斎79——　中央公論　三月号
人類の未来を語る（座談会『今西錦司座談録』）　河出書房新社　三月
輸出可能な国学（『柳田国男研究』）　筑摩書房　三月
科学と文化（対談・湯川秀樹）（『科学と人間のゆくえ——続半日閑談集——』）　講談社　三月
六月十二日・日本エスペラント協会設立——一九〇六（明治三九）——（『市民の暦』）　朝日新聞社　三月
◉Kyoto University African Studies, Vol. Ⅷ (ed.)　京都大学人文科学研究所　三月
◉EEM——日本万国博覧会世界民族資料調査収集団（1968—1969）——記録　記念協会　三月
日本国家の形成と海（座談会）　Energy　一〇巻一号　四月
山の民（ユーゴスラビア）（思索の旅　一三）

朝日ジャーナル　四月六日号
都市（対談・川添登）（『共同討議・日本人の風土』）　新人物往来社　五月
新しい自然観・風景論（対談・井上靖）（『共同討議・日本人の風土』）　新人物往来社　五月
行動中心の読書（対談・長谷川泉）　古典と現代　二七号　五月
〝内〟への窓「世界のなかの日本文化」日本文化研究所　六月
化政百五十年の展開（対談・佐伯彰一）すばる　一二号　六月
リビア砂漠あとさき（石毛直道『リビア砂漠探検記』）　講談社　六月
世界を変えた一一〇人（座談会）　文芸春秋　七月号
◉日本人の知恵（共著）　中公文庫　七月
漢字文明（監修）　Energy　一〇巻二号　八月
漢字文明とローマ字文明　漢字文明　八月
東アジア文明圏（対談・上山春平）　漢字文明　八月
国立民族学研究博物館創設準備室の開室に当たって「国立民族学研究博物館創設準備室―一九七三」　八月
◉現代の大和ごころ――新・国学談（共著）　角川文庫　八月

太田武男

最近の内縁問題――重婚的内縁保護の現状と今後の問題　ケース研究　一三七号　八月

小野和子

五・四運動期の婦人解放思想――家族制度イデオロギーとの対決――　思想　八月号
目覚めゆく中国の婦人　朝日新聞　五月三〇日

樺山紘一

正統と異端（中山治一編『大学ゼミナール西洋史』）　四月
堺旧市域の過去と現在（太田武男他編『都市における家族の生活』）　三月
スペインのコミュニケーション（『講座コミュニケーション』三巻）　六月
プルードンの分権主義（『現代都市政策講座』七巻　月報）六月

川勝義雄

漢字文明とローマ字文明（座談会・梅棹忠夫、谷泰、前川和也）　Energy　一〇巻二号　八月

河野健二

論壇時評　朝日新聞　三月二九、三〇日、五月一、二日、五月二八、二九日、六月二八、二九日、七月三〇、三一日、八月三〇、三一日
「力の論理」越える世界政治　エコノミスト　七月一〇日号
社会主義の正統と異端　読売新聞　八月一八日

熊倉功夫

茶書つれづれ　淡交　三月～八月
『瓶史』総目録・解題　茶湯―研究と資料　六号　五月
上林三入宛金森宗和書状について（共同執筆）　同右　五月

『戯場粋言幕之外』『客者評判記』『当世芝居気質』（校訂）
（『日本庶民文化史料集成』六巻「歌舞伎」）　五月

小南一郎

漢魏六朝の語りもの　人文　七号　五月
◉楚辭（『中国詩文選』六巻）　筑摩書房　七月

島田虔次

ある陽明学理解について　東方学報　四四冊　三月
中國を旅して　朝日新聞　五月一七日
解説・荻生徂徠全集第一巻　みすず書房　七月

多田道太郎

遊びと日本人　朝日ジャーナル　三月九日号～六月八日号
◉想像と創造――複製文化論　研究社　七月
「世界」を消化する「日本」（『日本人の百年』一七巻）　六月
日本人の生活様式――あそぶ（同右、一九巻）　八月
四つの性（『講座おんな』六巻）　八月
解説・松本清張集（『昭和国民文学全集』二七巻）　八月

田中謙二

朱門弟子師事年攷　東方学報　四四冊　三月
『朱子語類』外任篇　訳注(五)　東洋史研究　三二巻二号　九月

竹内実

大陸の土を拓く夢（細道の中国・七）　伝統と現代　三月号
玉樹長埋海上神仙島（同・八）　伝統と現代　五月号
中国の縁・韓国の旅（同・九）　伝統と現代　七月号

解説・佐々木元勝『野戦郵便旗』　現代史出版会　七月
思想の言葉　思想　八月号

永田英正

漢字の発生と展開　Energy　一〇巻二号　八月

中村賢二郎

王政と身分制・ドイツ（中山治一編『大学ゼミナール西洋史』）　四月

野村雅一

書評・ウラジーミル・プロップ『民話の形態学』　季刊人類学　四巻二号　三月

林巳奈夫

考古学研究室での先生（『水野清一博士追憶集』）　五月
長沙馬王堆一号墓出土の帛画　*MUSEUM*　二六七号　七月
中国考古見学記　月刊考古学ジャーナル　八四号　七月

林屋辰三郎

京都市編『京都の歴史』六巻、序説　学芸書林　三月
京都の歳事史（コミュニイティ　一五）　京都新聞　三月
古代の日本と朝鮮（座談会・司馬遼太郎他）　日本のなかの朝鮮文化　三月
古代史研究における史料――三・四世紀の日本
（『赤松俊秀教授退官記念国史論集』）　五月
解説・三浦周行『法制史の研究』　岩波書店　五月
桃楊争春――広州と長沙――　京都新聞　五月

◉日本芸能の世界――民衆文化のあゆみ　日本放送出版協会　六月
推陳出新――西安と洛陽　京都市史編纂通信　六、七月
祇園祭（対談・小田義彦）　オール関西　七月
世界美術小辞典・日本編文化史ⅠⅡⅢ　芸術新潮　七・八・九月
わが著書を語る『日本芸能の世界』　出版ニュース　八月
歴史と「庶民史料」　朝日ジャーナル　八月
風と流れと（夜・唐・祭・水・党）　朝日新聞　四～八月

樋口謹一

司馬遼太郎における史実と虚構　国文学　六月
ルソーの歴史観　創造の世界　二号　六月

日比野丈夫

日本のなかの中国文化――年中行事　文芸春秋臨時増刊　三月
スマランからジョクジャへ　華道　五号　五月
◉世界史年表（編者代表）　河出書房新社　五月
仕事の人・水野先生（『水野清一博士追憶集』）　五月

福永光司

中国の今と古　朝日新聞　五月一四日
列子（『中国古典文学大系』四巻）　六月
革命烈士の墓――中国を旅行して――　ちくま　五二号　八月

藤枝晃

百五十年前と百年前　図書　二八三号　二月
京の西陣　月刊高層住宅　七〇号　三月
幻の宗派三階佛法（推薦文）『三階教の研究』内容見本　六月
竹簡・木簡の作り方　アサヒグラフ　臨時号　六月
マルコポーロとの格闘　毎日新聞　六月一八日
敦煌学の一転機（推薦文）『敦煌秘籍留真』内容見本　七月
T・ティロ、ドイツ民主共和国科学アカデミーにおける古代東洋研究の現況（翻訳）　東方学　四六輯　七月

古屋哲夫

北一輝論（一）　人文学報　三六号　三月

前川和也

エンエンタルジ・ルーガルアンダ・ウルカギナー初期王朝期末ラガシュ都市国家の研究・序説　人文学報　三六号　三月

牧田諦亮

◉唐高僧伝索引（上）（共編）（『中国高僧伝索引』二巻）　平楽寺書店　三月
伝教大師録将来録追跡調査の試み（『伝教大師研究』）　早稲田大学出版部　六月

松原正毅

「オセアニア周遊」（共著）（梅棹忠夫編『EEM』）　日本万国博覧会記念協会　三月
◉目でみる人類学（共同編集）　ナカニシヤ出版　三月
キプロスのトルコ人　人文　七号　五月

書評・上田・林屋ほか著『歴史と人間』　人文　七号　五月

三宅一郎

世論調査型データ解析のためのコンピュータ・プログラムズ(4)　人文学報　三六号　三月

SPSS（社会科学のための統計パッケージ）概説(5)　京都大学大型計算機センター広報　六巻三号　三月

SPSS（社会科学のための統計パッケージ）概説(6)　同　六巻五号　五月

山下正男

書評・山元一郎著『空虚と実験』　朝日ジャーナル　一五巻八号　二月

山田慶児

◉ガリレオ（共訳『世界の名著』二一巻）　中央公論社　六月

◉人間学への試み（編）　筑摩書房　六月

横山俊夫

『国意考』にあらわれたまつりごとの世界　人文学報　三六号　三月

吉田光邦

わたしの生花論　小原流挿花　二月

文明のコミュニケーション史（『講座コミュニケーション』）　研究社　三月

理研と大河内正敏（『日本人の一〇〇年』一四巻）　世界文化社　三月

真宗史のひとこま　歴史と文学　五号　三月

京都の都市像　四月

悲劇の時代――文化からの疎外　日本及日本人　四月

◉やきもの（増補版）　日本放送出版協会　五月

◉萬金産業袋（校訂・解説）　八坂書房　五月

技術革新（『日本人の一〇〇年』一七巻）　世界文化社　六月

信仰とメディア　芸術倶楽部　七月

食器の文化史　栄養と料理　七月

美しかった日本　幼児開発　八月

日本人と日本文化（『文化と人類』）　朝日新聞社　八月

桃山の残照（『歴史の旅』京都）　小学館　八月

工芸史雑筆　日本美術工芸　三～八月

渡部徹

◉京都市同和地区住民生活実態調査報告書（解説編）（共著・秋定嘉和）　京都市　三月

◉日本社会運動史論（共編・飛鳥井雅道）　三一書房　八月

書評『横山源之助全集』一巻　日本読書新聞　四月二日

夢さめた革命戦線（『日本人の一〇〇年』一六巻）　五月

総評と労働運動（『日本人の一〇〇年』一七巻）　六月

「米騒動」・「疑獄シーメンス事件」（研秀『日本の歴史』一四巻）　八月

同和問題の正しい認識と解放への展望（講演筆記）　市報「あまがさき」　八月五日

人文
第九号
昭和四八年一二月一七日
京都大学人文科学研究所 発行
明文舎 印刷
非売品